

## 論文の和文要旨

論文題目 三島由紀夫における「日本回帰」：「日本」と「天皇」に着目して

氏名 高好眞

本論文は、三島由紀夫における「日本回帰」が「天皇」に収斂されていく道程を考察し、その特徴を究明することを目的とする。三島の「日本回帰」の特徴は、同時代「日本」の表象が「戦後批判」につながっており、批判のみならずその代案を「日本」に求めていることにある。「天皇」はその代表的な表象である。三島の「日本回帰」の起源は、1960年安保闘争以降を出発点と見なされがちだが、三島が20代後半から30代にかけて「日本」へ回帰していく図式の研究はまだ充分とはいえない。本論文では、三島の「日本回帰」の起源を1950年代に遡って見直し、そこから見えてくる「日本回帰」の動機、すなわち三島の戦後日本への問題意識を明らかにする。本論文の構成は3部10章からなり、各章の梗概は以下の通りである。

第1部では、世界旅行（1951・12・25～1952・5・8）以降の主題の変化に注目し、同時代「日本」の表象を考察する。第1章では、牧歌的な恋愛小説と目された『潮騒』（1954）における「古典主義」の方法を分析し、外遊後の三島の「日本」への意識を論じる。平凡な男女が試練を乗り越え結ばれる物語には、作者のアメリカ占領から独立した「日本」への期待が込められている。また、彼らの歩みに投影された明るい〈未来への展望〉は、作者の「日本」に抱く希望を描出している。一方、後半に垣間見られる沖縄の殺風景な様子は、「占領」後の従属的な日米関係を映している。こうして『潮騒』は、独立後のあるべき「日本」と同時代「日本」といった二つの「日本」を通じ、外遊以降の作者の歩みを予示している。

第2章では、外遊後から『金閣寺』に至るまで「占領」以降の日米関係を取り扱った『真夏の死』、『江口初女覚書』、『鍵のかかる部屋』を中心として「占領」と「アメリカ」の表象を見直し、「日本回帰」の動機を考察する。『真夏の死』（1952）の朝子は、二人の子供を一遍に無くした悲しみから癒え、退屈してきた挙句「生」の充溢感を取り戻すため「宿命」としての「死」に飢える。1952年時において〈生の活性化〉の機縁としての〈死の高揚感〉の召喚を「日本」の新たな〈原点〉として呼び込もうとした背後に「アメリカ」の影を読み取った。『江口初女覚書』（1953）は、占領の「虚偽」を取り扱っている。三島が吉田茂の時代に見抜いた戦後政治と日本国民の「欺瞞」に関する発言に触れて、経済発展のために国の自立を犠牲にした現況への作者の問題意識を明らかにする。『鍵のかかる部屋』（1954）は占領の「無秩序」に対抗する主人公の挫折を描いている。作中の「アメリカ」の表象は、「占領」の後にも「アメリカ」の影響力が健在である現況を表わしている。

第3章では、日本アプレゲール事件の代表とされる金閣焼失事件（1951）に材をとった『金閣寺』（1956）を対象とする。〈美の問題〉から〈啓蒙的な放火〉へと変わる〈放火の動機〉に注目して

重層化される主題を分析し、「戦後批判」としての放火を明らかにする。『金閣寺』の物語は、①「美」に対するねたみや恨み、②放火の「教育的効果」、③「徒爾」としての放火、といった三つの放火の動機によって組み立てられている。これらの放火の動機は、三島の文学のみならず、三島の人生の遍歴と照応している。②の啓蒙的放火は「われわれの生存」の問題を人に学ばせることにあって、ここで作者が目論んでいるのは戦火を逃れた「金閣」の存続に「アメリカ」の影を窺わせ、日本の対米依存を露にすることである。「心象の金閣」と「現実の金閣」といった二つの「金閣」のあり方は、三島の天皇の像を先取りする。とりわけ「理念」としての天皇は、「絶対の探求」のパロディ―を目論んだ〈禁忌〉としての「究竟頂」に描かれている。

第4章では、『鏡子の家』(1959)における〈時代への挑戦〉の背後にある従属的な日米関係を明らかにし、「一つの時代」として造形された「人物」を分析する。鏡子と四人の男たちは1954年時に、敗戦直後の焼跡の時代に郷愁を覚えている。「時代」と「ニヒリズム」をともに描こうとした作者の意図に反し、彼らは外界に無関心を装っており、この矛盾は不評の一因となった。作中の「人物」が日本の〈近未来へのヴィジョン〉を映し出しているため、同時代感情としての「ニヒリズム」は後退している。作者の企図した「経済的ロマネスク」は、戦後の「俗物の社会」の形成において「経済的原因」で結ばれている日米関係を通じ、戦後社会の固着化に作者が感じた「ニヒリズム」が前景化される。精一郎の〈現状維持〉としての生きる方法に対峙する夏雄の「再生」と「希望」の契機となる「水仙」は、三島の内なる「天皇」の役割を先取りする。

第2・3部では、1960年以降の三島の「日本回帰」の過程を、伝統への回帰、歴史への回帰、「文化概念としての天皇」への回帰、といった三つの方向性をもって考察する。第2部では、〈観念〉としての「天皇」と「父親の問題」を中心に〈二面的な天皇の像〉を考察する。第5章では、「二・二六事件三部作」(1966)という枠組みから『憂国』(1961)の意義を考察する。武山中尉は、新婚であるが故に同僚の配慮で決起から排除され、検挙に加わるのを拒否し妻と心中を遂げる。自決行為の背後にある「大義」を通じ、「神」としての天皇を予示している。パタイユにおける「エロティシズム」の本質は「死」によって得られる「連続性」にあり、「四散した世界像」を「統一原理として保持」するその働きは、以降の作中で「父親の問題」を通じ「天皇」の役割に受容されている。こうした「エロティシズム」は、三島の「最期」を理解する端緒となる。三島の自決は、「死」をもって〈日本文化の連続性〉の根拠たる「天皇」を提示した象徴性を孕んでいる。本章では、〈日本文化の連続性〉における「天皇」の意義について「文化概念としての天皇」(『文化防衛論』)をもって論じた。

第6章では、『林房雄論』(1963)と『美しい星』(1962)をつなぐモチーフとなる「思想の相対性」に注目した、磯田光一の見解に基づき「空飛ぶ円盤」の象徴性を中心として三島の「日本回帰」における〈ロマン的願望〉を考察する。『美しい星』の中で自称「宇宙人」たちは核の危機をめぐって反目するが、「思想」に尽くす彼らの「心情」は救われる。〈救済〉としての「円盤」は「水仙」と共に、三島が「エロティシズム」に見出した「天皇」というものの役割を果たしている。「円盤」との遭遇は「陶酔」の体験として「現実」を刷新する契機となっている。三島は核時代における「想像力」への信頼に反し、「想像力」を掻き立てる「陶酔」を重んじている。本章では、核時代における大江と三島の認識の異同に触れ、「芸術的な観念」という批評性を孕んだ「円盤」と現況の危機に抗して「日本」を守ることを力説した三島の問題意識を解いた。

第7章では、近江絹糸労働争議（1954）に材を得た『絹と明察』（1964）における「天皇」と三島の「帰郷」を考察する。作者が「絹」を「日本的なもの」とし、近江商人の系譜を継ぐ駒沢をその「代表」に位置づけた根拠を明らかにする。天皇を中心とした家族主義国家観を連想させる駒沢の「善意」と「偽善」には、三島の〈二面的な天皇の像〉が反映されている。本章では、日蓮宗信徒に設定された駒沢の独善的な家族主義と三島の内なる「天皇」との関係を論じた。ハイデグリアンの岡野がヘルダーリンの「帰郷」の詩から読み取った暗さには、三島が自分の帰るべき「故郷」をめぐる思いが込められている。本章では、保田与重郎、ヘルダーリン、三島における「故郷」の異同に触れて日本を「日本」たらしめる〈精神〉としての三島的な「故郷」の特徴を考察した。ハイデグラーの注釈を媒介した三島のヘルダーリン受容は、文武両道の人である蓮田善明的な精神への回帰として三島の「最期」につながっている。

第3部では、三島の最晩年における「天皇」の在り方を考察する。第8章では『サド侯爵夫人』（1965）を対象とする。澁澤龍彦の「イノサンス」としてのサド像を、三島の内なる天皇の具現者たる倭建命と関連づけ論じる。三島はサドの妻であるルネが19年間夫を待ち続けた後に、釈放された彼との面会を拒否し修道院に入る史事を「謎」とし、その「論理的解明」を試みた。本章では、物書きになったサドと彼が書いた「物語」を否定する〈ルネ夫人の選択〉が孕んだ寓意を解く。ルネが老境に入ったサドを否定したのは、昭和天皇に対する作者の〈価値判断〉として考えられる。また、「神」に帰依するルネの選択は、作者の内なる「天皇」への志向を示唆している。サドが「物語」に閉じ込めた世界は、物語化されてしまった戦後歴史の比喻であり、天皇の人間宣言がもたらした歴史を否定すべく、三島は〈歴史への回帰〉を敢行した。本章では、ルネが拒否したサドを戦後の天皇に見立てる根拠を明らかにした。

第9章では、『英霊の声』（1966）において友清欽真の「帰神法」が、松本健一や林武志が指摘した、「天皇」のことを語るための装置であることに着目し、二・二六事件の青年将校と特攻隊員の霊が天皇に投げかける怨嗟の基底にある〈鎮魂の不在〉と〈人間天皇〉の問題を論ずる。『英霊の声』では修羅能においては必須の鎮魂という様式が排除され、霊たちは生前のことのみならず死後のことまで恨み辛みを語る。怨霊となった「英霊」の境遇は「神」としての〈天皇の不在〉を表している。『朱雀家の滅亡』（1967）で舞台に姿を現さない「天皇」を代弁する経隆は、戦争責任が問われる〈人間天皇〉の寓意であり、「神」としての天皇は「夙うのむかしに滅んでゐる」という台詞にその〈不在〉を表わしている。三島の自決は、戦死者の名誉回復のため「神」としての天皇の召喚を試みた行為であり、人間宣言をなしたため「架空なる観念」となった天皇の位相に抗して「文化概念としての天皇」に殉じた意義が見出される。

第10章では、三島の天皇論として、加藤周一や和辻哲郎が述べた〈日本の神〉に触れつつ「理念」としての天皇の特徴を考察する。本章は、「日本回帰」の中心にある「天皇」が〈相対主義〉と〈絶対的・超越的なもの〉への志向に基づいている点に着目した。和辻哲郎が「神話伝説における神の意義」で主眼点を置いている「祀る神」の「尊貴性」は、三島の天照大神への志向と類似している。三島において「天皇」は、戦後の精神的空洞化を刷新する求心力であり、「革新の原理」となっている。それは、「天皇」こそ「お祭り」の主祭として〈日本文化の連続性〉の根拠であるという点に基づいている。